

## 創刊のことば

梅 原 猛

ここに我々は、国際日本文化研究センターの紀要の第1集を発刊することができた。これはセンターとしての最初の学問的業績の提示である。

国際日本文化研究センターは、一昨年五月に設立された大学共同利用機関の一つで、そこでは国際的・総合的共同研究と、主として外国入学者への研究協力が義務づけられている。従って、ここでの教官の義務は、共同研究と研究協力である。学問は個人研究であり、共同研究などありえないという考えがあろう。それはもつともである。

私は、日本で成功した共同研究として、桑原武夫型と塚本善隆型と今西錦司型があると思う。それらは全て京都大学人文科学研究所で行われた共同研究であるが、この国際日本文化研究センターの設立に桑原武夫先生が大きな力を貸して下さったことに象徴されるように、このセンターは、京都大学人文科学研究所が大きな成果を納めた共同研究を一層組織的にかつ国際的な形で行うとするものである。

桑原型というのは、桑原武夫先生が「フランス革命の研究」などで行ったように、一つの新しい仮説があり、その仮説をさまざまな専門領域を異にする学者が検証しようとする方法である。このフランス革命に対する研究によって日本の明治維新が見直され、それが歴史学界に大きな問題提起になったわけである。また、塚本善隆型というのは「肇論の研究」などのように、日本の大学においてブランクになっている中国仏教の研究を超宗派的に行ったものである。それによって、インドにもとを発した仏教がいかに中国において発展し、それがどのように日本に伝えられた

かが明らかになった。今西型というのは、すぐれた思想家である今西錦司先生のもとで十年続けられた研究会である。その研究会の成果は今西先生の定年の時にまとめられたが、そこで今西先生は、「十年間研究をしたが、あまり共通の成果などというものは作れなかった」と述べておられるが、十年にわたる共同研究、それは学問的「オシャベリ」の会」であったかもしれないが、その会の中からどんなにすぐれた学者が輩出したかはよく知られている。私は、共同研究にはいろいろな型があり、桑原型や塚本型が望ましいが、今西型もあってもよいと思う。

このようにみると、やはりよい共同研究の主催者はすぐれた学者でなければならないということである。独創的な仮説を持つ人でなければ、とても実り豊かな共同研究の成果は得られない。共同研究は、主催者の提示する仮説のもとにそれに適当な学者を集めて、その仮説の正否を研究することによって成り立つと私は思う。仮説を検討していくうちにまた別の仮説が思い浮かび、いろいろ創造的な対話が可能となる。そういう喜びなしには共同研究は成り立たないと私は思う。

このセンターの共同研究の成果はまだ出ていない。共同研究は三年ないし四年続けられ、次の一年にその研究の成果をまとめることになっている。従って、このセンターの本来の仕事である共同研究の成果は、二―三年たたないとはっきり表に現われてこない。それまではやはり紀要に個人研究の成果を発表するより仕方がない。それで我々は、ほとんど全員紀要に執筆することにした。この紀要に執筆しない人は次に発表される英文の紀要に書くことにしている。もとより論文の発表は恐ろしいことである。それは研究を人の批判の目にさらすことである。我々はこの紀要に執筆し、世間の批判を受けることにした。それで原稿の長さも自由にしたために、大変浩瀚なものになった。

私は、このセンターは国際的・総合的な共同研究の機関であるが、同時に新しい学問の創造の機関でもあると思っている。この紀要から人類社会に大きな光を与える新しい理論が生れてくることを強く希望するものである。